放送大学
神奈川同窓会

波濤

http://hatoh.net/

第 57 号

発　行　放送大学神奈川同窓会
　　編集委員会
責任者　佐桒 愼二
発行日　2019年7月12日
会員数　610名（2019年4月1日現在）

「学びて時にこれを習う また説（よろこ）ばしからずや」

会長　佐桒愼二

平成 31 年は 4 月 30 日で終わり 5 月 1 日より新たな年号の「令和」が始まりました。神奈川同窓会も平成 2 年（1990 年）に創立され、平成とともに歩んで、来年は 30 周年を迎えます。創設時に 119 人だった会員は現在 610 人に増加し、全国の同窓会の中でも有数の規模になっています。令和時代も同窓会の皆様と共にしっかりとした歩みを続けて行きたいと願っています。

ところで今年 3 月 23 日に NHK ホールで行われました放送大学学位記授与式において、私は同窓会連合会会長として祝辞を述べる機会が与えられました。式場には全国から 2,000 人あまりの卒業生・修了生が出席され、中にはご家族を同伴される方もおられて、晴れやかな雰囲気に包まれていました。私は皆様が放送大学で学ぶことの喜びを実感され、また共に学んだ多くの仲間を発見されたことをお祝いし、あわせて幕末の儒学者の佐藤一斎の「言志四録」の言葉を引用して、学び続けることの大切さをお話ししました。「少（わか）くして学べば、即ち壮にして為（な）すことあり。壮にして学べば、即ち老いて衰えず。老にして学べば、即ち死して朽（く）ちず」。これはまさしく生涯学習を目的とする放送大学の目指すところです。またこのような貴重な機会を与えてくれた放送大学への感謝の気持ちを忘れず、母校の発展に心を寄せていただきたいとお願いしました。

放送大学の同窓会員の中には、第一線の活動を終了されて後、放送大学で学んだ方が多くおられます。人生100年時代を迎え、これらの方々にとってこれからの長い人生をどう生きるかが大変重要になって来ました。放送大学で生涯学習を続けることは、佐藤一斎の言葉にあるように、衰えず、朽ちずのために大切な生き方です。

またその学びの成果を自分の中に押しとどめることなく、社会に還元することも重要です。同窓会員の中には今までのキャリアや放送大学で学んだ成果を活用して様々な活動をされている人が沢山おられます。地域やサークルでのリーダーや世話役、講演会活動、子供の教育支援などの NPO 活動、現役世代へのアドバイスや仕事のサポートなど様々です。論語の言葉にある「学びて時にこれを習う、また説（よろこ）ばしからずや」。学んだ成果や身に着けた知識や経験を実践することはなお一層楽しいということでしょう。高齢の社会的弱者として、社会から保護され、支援されるだけの存在ではなく、何か小さなことでも社会にお役に立てるように実践に心がけることで、社会への務めを果たし、生きる楽しさを見つけたいものです。

第30回通常総会

2019 年 5 月 16 日（木）神奈川同窓会第 30 回通常総会が開催されました。同日会員総数 609 名、出席者 6 7 名、委任状提出者 316 名、総数 383 名で会則 14 条により総会は成立しました。提出された 6 議案が審議され、全て原案通り承認されました。

会長挨拶では佐楽会長より「同窓会会員同士のコミュニケーションの活発化と共に会員増加を最重要の目標とし、積極的なＰＲと活動を通して歴史ある神奈川同窓会の良さを理解していただき、会員の増員に努めます。更に来年迎える設立 30 周年の節目に向けて記念行事や記念誌の準備を進めてゆきます」と挨拶がありました。

総会後、高橋邦年客員教授による「have a speak って何が変？」の演題で、楽しく興味深い特別講演をいただきました。その後の懇親会には、福富センター所長と河内事務長のご参加をいただき、来年の設立 30 周年記念行事に向け、学習センターとの連携を一層深めました。会員の皆さまとは忌憚のない会話が弾み、盛況の内に終了しました。

（浅井公子）

高橋邦年先生特別講演会
演題：〈 have a speakって何が変？〉

第 30 回神奈川同窓会通常総会後、高橋邦年先生（横浜国立大学名誉教授／放送大学客員教授）に特別講演会をお願いし、専門の英語学の立場で色々な角度から英語を眺め、考える機会を提供して頂きました。会場には約 90 名の方が出席されました。折しも先生の体調が優れない中を押して駆けつけて頂き感謝いたします。

言葉は通例実際の場面で用いられます。その際よく似た 2 つ（あるいはそれ以上）の構文のいずれを用いるのが適切なのかを考えることは、的確なコミュニケーションの成立に不可欠と思います。見かけの構文は全く同じで、強勢や音調の違いにより、意味やニュアンスが異なるケースを説明して頂きました。

演題にあるように、have a ＋ verb(動詞)(以下…とします) の…に使える単語と使えない単語があり、同様に take a … の … や、give a … の … の動詞にも制約があるとのことです。have a … の場合、比較的短期間の持続可能な行為・目的を持った行為等により容認され難いケース等説明されました。従って have a talk は使えるが、have a speak は使えないことが理解できました。

語学を 50 年以上避けて通ってきた私にとって今回の講義内容が理解できるかどうか不安でしたが、先生の「謎解き話」に引き込まれ、事例毎に「はて！どうしてだろう？」と考えます。

熱心な先生の説明に、質問の時間が無くなってしまう程盛況で、「興味を引き出す指導方法」に感心いたしました。

（金田保男）

卒業生の集い・祝賀茶話会

3月16日（土）13時30分から「卒業生の集い」が神奈川学習センターの第8・9講義室で挙行されました。式典に先立ちロビーで同窓会から桜茶が振舞われました。卒業生、修了生の合計は249名で式典には45名が出席。

福富所長の祝辞は「AIや仮想通貨など新しい価値観が急速に普及している。適応していくには学び続けること。機会を見つけて再び学びの場に入って欲しい」とのお話でした。

来賓の佐楽同窓会会長からは「人生100年の時代。放送大学は生涯学習の場でもあり、学んだことを社会還元することも大切です」と話されました。

所長表彰は成績優秀の竹内礼子さん、高齢者の飯田好雄さんが受賞され代表して竹内礼子さんが挨拶。また7名の名誉学生が紹介され、その中の櫛田政五郎さん、杉山秀雄さん、石丸迪子さん、疋田勝三郎さんの4名は同窓会の会員です。そのあと神奈川合唱団による放送大学学歌と「第九」の斉唱が行われました。

式典後、第7講義室で学習センターと同窓会による祝賀茶話会を開催しました。卒業生、修了生全員が1分間スピーチを行い苦労話や成功談のご披露があり盛会裡に終了しました。また同窓会は叢書、バッジの販売を行いました。　（飯塚武夫）

学位記授与式・祝賀パーティ

3月23日（土）全国の学習センターから卒業生・修了生が集い、11:00から学位記授与式がNHKホールで挙行されました。

本年度の卒業・修了生は6,317名の多きに上り、また昨年から引き続いて、二年目になる博士課程から7名の方が博士号を授与されました。

主催者として來生 新学長が挨拶を述べられ、同窓会連合会会長に就任された佐楽会長が、幕末の儒学者・佐藤一斎の「言志四録」のなかの箴言「少（わか）くして学べば、即ち壮にして為すことあり。壮にして学べば、即ち老いて衰えず。老にして学べば、即ち死して朽ちず」を引用して祝辞を述べました。

今回初めての試みになる特筆すべきことは、ベートーヴェン作曲の交響曲第9番第4楽章「合唱」が学歌とともに披露されたことでした。全国の学習センターから応募され、選りすぐりのメンバーで構成されて、この日の為に練習に練習を重ねた180人の合唱団と山本純ノ介ご夫妻による指揮・ピアノ伴奏で、さしもの広いNHKホールがどよめくほど鳴り響き、式典が一段と華やかになりました。

学位記授与式終了後の祝賀パーティは「ハイアットリージェンシー東京」に会場を移し、13:45から開始されました。卒業・修了生597名が出席され、そのうち神奈川学習センターからは卒業生62名、修了生8名が参加し、全国最多でした。

パーティの運営には、神奈川同窓会から18名が協力し、主に式典ホールからホテルへのバス移動、銘酒コーナー、記録撮影、本部スタッフなどを担当しました。

歓談は名残り尽きなく続きました。15:40石和健治実行委員長（熊本SC同窓会会長）が閉会の辞を述べられ、盛大な拍手をもって卒業生・修了生をお見送りし滞りなく式典が終了しました。（永井藤樹）

卒業生の言葉

学びの旬

竹内礼子

2013 年に選科履修生として入学しましたが、まさか 2 回も卒業し、6 年も続くとは当時の私は全く想像しませんでした。「2 年間で臨床心理のエキスパートを取得する」それが目標でした。それが確実になった時卒業してみたくなり、3 年次に編入したのは 2015 年春でした。

当時の卒業要件では私には外国語の単位が必要で、「英文法 A to Z」の放送・面接両方を履修することにしました。しかし、私は英語が大の苦手でした。履修前に過去問をやったら 15 問中 5 問正解という有様。どうなることかと思いましたが、それから頑張った甲斐があり、よい成績を戴きました。これが私の転機になりました。やればできる！自信がもてました。

苦手な科目や難しい科目で挫折しそうな時は、いつもこの時のことを思い出し、気持ちを奮い立たせています。統計を学ぶ前段階で「初歩からの数学」を履修した時も、式の展開がわからず数日間、その箇所を考えたこともありましたが、わかった時の嬉しさは格別でした。通信指導で 10 問中 4 問しか正解しなかった科目もありました。

そして、このたび「所長表彰」という思いがけないご褒美を頂戴しました。途中で諦めず地道に単位を積み上げてきただけですが、評価して戴いて嬉しかったです。

1 回目の卒業を前にした時、10 代の頃にこれほど熱心に勉強していたら、私の人生は違っていたかもしれないと思ったこともありました。10 代の頃の私にとって勉強は「させられているもの」で退屈なものでした。しかし、今、誰に強制されるわけでもなく、自ら「する」勉強はなんて楽しいんだろう！と思います。初めて学ぶ楽しさを知りました。

私の経験が少しでも役に立てばと思い、1 回目の卒業後からK-サポートに参加させて頂いております。

学びたいと思った時が、その人にとっての学び時。旬なのだと思います。そして、私の旬はまだまだ続きそうです。学べる環境に感謝しつつ 7 年目の学生生活が始まります。

卒業生の言葉

人とのつながりは財産

呉 春美

「空の巣症候群」にみえた（友人いわく）私に、その友人が放送大学を勧めてくれました。

2004 年放送大学に入学し、学習センターは東京世田谷学習センターでした。1〜2 年はただ黙々と勉強し試験を受け、誰と話すこともなく過ぎていきました。ある日、面接授業で神奈川学習センターを訪れた時の昼休み、談話室で賑やかで大きな話し声が聞こえてきました。とても楽しそうなので思い切って質問しました。「それ何ですか？楽しそうですね」と聞いたら、「放友会というサークルだよ、今日ちょうど総会やっているから第 3 教室に行ってごらん」。総会には参加出来ませんでしたが、入り口で会費を納め資料をいただき午後の授業へ……。

それからの学生生活は 180 度変わりました。いろいろな行事のお知らせをいただいたので、積極的に参加しました。そのうち役員もやらせていただき人づき合いも密になり、楽しい学生生活になりました。途中で学習センターを神奈川に替え、4 年で卒業予定でしたが 10 年いてもいいというのを聞いて、急にゆったりのんびりと楽しみながらようやく 8 年で 1 回目の卒業をしました。その後同窓会に入会しました。

この後半の 7〜8 年、20 年いた愛猫が亡くなり、1 か月後には実母が癌の末期で実家に毎週月曜日から木曜日まで看病に行き、3 か月後に亡くなりました。間髪入れずに義母が倒れ 1 年間病床の身となり看取りました。そうこうしているうちに自分もメニエル氏病で入院した後、体調不良となり再入学はあきらめました。このままやめてしまおうとも思ったのですが、サークルから送られてくるメールを読んでいると、この学友と縁が切れるのはあまりにも寂しいな〜という思いがあり、秋に再入学しました。しかし体調の関係であまり積極的に参加することは出来ませんでした。勉強は半年に 1 〜 2 科目のペースで 5 年半、今回 2 回目の卒業となりました。

今、私生活が忙しいのでしばらく休み、再入学したいと思っています。友人にも勧めています「放送大学は楽しいよ〜」って。

名誉学生の言葉

放送大学との出会いに感謝

櫛田政五郎

福祉との関わりから福祉関係の知識が必要となり、放送大学「生活と福祉」専攻に入学。入学式の日はタイミングが悪く、自身の大学病院の入院検査日と重なり残念ながら入学式には出席出来ませんでした。

入院検査は心臓カテーテル検査で、「循環器科学」の授業科目を幸いにも選択していましたので、早速受講科目の知識が役立つことになりました。また、家族の在宅介護でも「看護学概説」科目が実践で有効活用することができ共にタイムリーでした。

その後「発達と教育」を専攻、継続して再入学しました。放送大学からも生涯学習として継続入学を推奨していましたのでそれに共感し、専攻コースは「社会と産業」「人間と文化」「自然と環境」最後に「情報」コースを履修しました。

このように、15 年余りの長期に亘るモチベーションを維持できた要因は、一つに興味ある科目が多く特に「地学」では、地球の構造と成り立ち。「天文学」では、宇宙に関する話。また、「生物学」では、生命分子と細胞のミクロの話から種々先端科学技術の話まで興味が尽きない講座が満載でした。

「情報」コースではパソコンによる実技授業で「コンピュータ・プログラミング入門」は我々世代にとってまったく新しい分野でかなり難解でした。これからの若い世代には必修科目であり、小学生の低学年から授業に採用されることが決まっています。

二つ目は、学習センター内でのサークル活動への参画。そして、同窓会では社会貢献活動の一部にも携わることが出来たことは大変有意義でした。また、日常生活の一環として学生生活もルーティーンとして取り入れたことはモチベーションを維持することの要因になったと思います。私の人生にとって放送大学との出会いは感謝の一言です。なお、今後も今暫くは大学生活を継続するつもりです。

名誉学生に贈られた学長表彰楯

名誉学生の言葉

平成の終わりと共に

石丸迪子

私が初めて放送大学に入学したのは 50 代の半ばです。6 コース卒業の今年（平成 31 年）3 月まで、23 年の歳月でした。入学のきっかけは、欧州への旅行です。ツアーで訪れた教会や鑑賞した絵についてもっと知りたくなり、選科履修生として最初に「美術史と美術理論」など 2 科目だけ選んで学びました。アトリビュート（持物）などの勉強は、今も美術鑑賞に役立っています。

2 年目からは全科履修生となり「人間の探求」専攻を 4 年で卒業しました。かなり頑張りましたので、その時の感激は今回の卒業以上だった気がします。引き続きすぐ「発達と教育」専攻に再入学しましたが、内容の難しさに加え頑張った反動もあったのかやる気は半減、遅々として進まない最中にカリキュラムの改編がありました。「心理と教育」コースへの変更を選択し、卒業出来たのは 10 年後になりました。しかしこの時期韓国語の面接授業で知り合った人達と同好会を立ち上げ、サークル活動も始めました。釜山やソウルの韓国放送通信大学生ともご縁が出来て、互いの国を訪問したり、メールを交換したり交流は今も続いております。

3 度目の「社会と産業」コースから勉強は苦でなくなり、直近 8 年間で 4 コースを終えました。印象に残っている科目は沢山ありますが、その一つが「生活と福祉」コースの「ものとして、心としての衣服」です。物に命を認め粗末にしてはいけないという「もったいない」に特に共感しました。縫い物が趣味で、端切れなどを使って小物作りを楽しんでいますので、励みになりました。

最後の「情報」コースは、情報セキュリティなど今の時代、まさに必須の科目でした。40 年前アルビン・トフラーが著書『第三の波』で社会の情報化を予言していますが、それが今や、かつての産業革命に匹敵する情報革命の波となって高齢者の私にまで押し寄せ、パソコン・スマホに翻弄されている状況です。サークル仲間とは、共に学び語り合い、絆を深めております。軽いきっかけで入学した大学ですが、テレビというメディアのおかげで続けられ、私自身の世界に対する視野を拡げてくれました。平成の終わりと共に、名誉学生にまでなれましたことは、忘れられない思い出になります。温かく見守ってくれた家族に感謝しつつ、これからも学び続けていきたいと思っております。

名誉学生の言葉

グランドスラムを超えて

杉山秀雄

私の平成時代は半分以上が放送大学に在籍していました。ことに、初めの元年と最後の 31 年の二つの放送大学学位記授与式は生涯心に残る儀式でありました。

まずは、平成31年3月23日はNHK ホールで挙行された学位記授与式に於いて、最後の「情報」コースを卒業し全コース修了を認定され、表彰状と名誉学生の称号をいただいたことです。これらにより、放送大学で永年にわたり学んだ証を得たのだと、ひとしお、感激の念が胸に響きました。

次は 30 年前の平成元年 3 月 21 日に教育会館で挙行された初めての放送大学学位記授与式で、第一回卒業生 544 名の中の一人として参列し、初めて学位記を授与されたことです。この式典には皇太子殿下を迎え、文科省他大学関係の重鎮が臨席され格式高く荘厳なものでした。それにもまして放送大学第一回卒業式の模様を取材するためにマスコミ各社が殺到し、テレビ、新聞で華々しく報道され、放送大学の存在が社会に大々的に喧伝されました。こうした感慨は今でも印象深く残っています。

とかく、実社会を生きるには本人の実力は勿論のこと、それを裏付ける学歴も必要だと思い、昭和 60 年 4 月に放送大学が開学するや専攻は「産業と技術」で入学しました。圧巻は、教授陣にブランド大学の著名な教授が名を連ね格調高い講義をされていたことです。これには大いに魅了されました。この頃はグランドスラム等、まったく考えず、次は興味のあった心理学を学びたいと思い、専攻は「発達と教育」で再入学し、ゆっくりと楽しみながら進め平成 8 年 3 月に卒業しました。

しばらくして、平成 14 年大学院修士課程が開学されましたが、研究テーマが定まらず、各分野の興味ある科目のみを選択し、平成 19 年 3 月に所定の単位は修得しました。それから、平成 22 年 4 月頃になって、同窓生の活動に触発されグランドスラムに挑戦してみようかと思い立ち、①平成 24 年 3 月「生活と福祉」コース卒業 ②平成 26 年 3 月「人間と文化」コース卒業 ③平成 28 年 3 月「自然と環境」コース卒業 ④平成 31 年 3 月「情報」コース卒業と一気呵成に邁進してきました。

このような経緯を辿りグランドスラムは達成したものの、科目によっては、単位は取得したけれど、未だ解明できていない分野もあります。この辺のレビューも含め、今後は更なる知的好奇心に赴き、生涯学習（楽習）としてゴールを決めて未知の分野を拓いていきたいと思います。

卒業生ショートメッセージ

◆海老名市　東出 久：2年間「楽問」をやるという気持ちで臨みました。論文作成を通じて方法論を学び直すことができたのは有意義でした。学問を「楽しむ」から少々「こだわる」ようになる事ができたかと思っております。さらに自分なりに「極める」ことができると嬉しい限りです。

◆横浜市　志摩舎人：2012年に全科履修生として入学しました。私の場合発展途上国の仕事が長く「人間と文化」コースには国際関係論、文化人類学、異文化理解などの興味深い講座がたくさんありました。稲村哲也先生、高橋和夫先生にはお世話になりました。

◆横浜市　森　茂房：定年退職の暇つぶしと認知症予防に役立つだろうと「社会と産業」コースに入学し、この3月に卒業しました。個人的事情での再試験科目もありましたが充実した6年間でした。再入学は「生活と福祉」コースです。これからはのんびり楽しみながら学ぼうと思います。

◆横浜市　山本喜代子：心底挫折感を味わいつつも数倍を超える喜びがありました。それは感情の変化の中で精神が鍛えられ強靭になっていたことです。今後は“精神一到何事か成らざらん”の心意気で体力強化を目指します。

◆横浜市　石黒敬彦：放送大学に入学して早3年、心理学を勉強してみたいとの思いから、学期ごとに10以上の講義をとり学習センターに毎朝通ったことが、今は懐かしく思い出されます。同窓会では、また新たな先輩、友人の輪が広がること、楽しみにしています。

◆横須賀市　鈴木菊子：私は入学時、外国語として韓国語を選択しましたが、初めて目にする文字で発音が出来ませんでした。サークルの「韓国語同好会」に入会し、お昼休みには同好会の先輩に教えていただき、その年の単位認定試験ではⒶをとることができました。そしてサークル活動を通し勉強の楽しさを知り、4月から「社会と産業」コースに再入学しました。

◆横浜市　前田展宏：このたび無事に「自然と環境」コースを卒業できました事、神奈川学習センターのお仲間に感謝いたします。若い頃より興味のあった「生物」をまた学び直しということで始め、5年がかりで卒業しました。現在神奈川県の認可による自然関連のボランティアを進める中、大学院に進み今は絶滅してしまった「ニホンオオカミ」の研究をしています。

特集：「平成時代を振り返って」

放送大学25年生

犬伏秀一

放送大学の学生番号の頭 2 ケタは入学年のようです。私の学生番号は 85 から始まります。つまり、1985年（昭和60年）放送大学が出来た年に入学いたしました。ところが、生来の飽きっぽい性格と、仕事が忙しいことで、満期退学、再入学、授業料未払い退学、再入学を繰り返し、なんと 25 年後の平成 22 年に無事、学部を卒業することが出来ました。

せっかくご縁が出来たのに、このまま終わるのは残念とばかり、大学院修士課程に入学いたしました。故天川晃教授のゼミに参加し、指導教員はなんと放送大学昭和 60 年入学同期の田口一博新潟県立大学准教授でした。学部が 25 年だから、大学院も 10 年ぐらいかかるかな、と暢気に構えていましたらとんでもないことになりました。

毎月行なわれる「天川ゼミ」では、毎回修士論文の進捗状況の報告が求められ、天川先生、田口先生、ゼミ卒業生などから内容について厳しい指摘や質問が飛んできます。また、弘明寺商店街にある居酒屋「玄や」で行われる懇親会（通称「玄やゼミ」）では、ほろ酔い加減の天川先生から、さらに突っ込んだ指導をいただきます。前月から論文が進まないときは、学習センターでのゼミをサボって「玄や」に直行したこともあります。

さらには、修士論文締め切りの 1 か月前には「もう無理」と、2 年での修了をあきらめている私の職場に田口先生が来られて、熱血指導をしてくださいました。このようなスパルタゼミのおかげで、まさかの 2 年で大学院修士課程を修了することが出来ました。

あの厳しい指導と「玄やゼミ」がなかったら、修士論文は完成しなかったと思います。
そして、改めて私にとっての平成を振り返ると、まさに放送大学神奈川学習センターと「玄やゼミ」の時代だったと、懐かしく思い出します。

特集：「平成時代を振り返って」

平成の中間地点で出会った放送大学

小田妙子

私は、平成 17 年 10 月に科目生として放送大学に入学しました。短大を卒業以来、30 年間も勉強から離れていて、教科書の内容が頭に入るか自信がなかったのですが、単位が取れたので、翌、平成 18 年 4 月に全科生として勉強を続けることにしました。

入学の動機は、戸塚区の広報紙で見つけた「傾聴ボランティア養成講座」を受講し、人の話を聴くには心理学を学ぶことが必要と感じ、当時、「発達と教育」と呼ばれていたコースを選択しました。「発達と教育」コース専攻の人はほとんど「認定心理士」を目指していました。認定心理士の資格取得申請のための単位を取るにあたって、面接授業で、一番遅いコマの授業の後、帰宅し、深夜までかかってレポートを仕上げ、翌朝、一番早いコマの授業で提出しなければならなかったことが、印象に残っています。3 年次編入で、3 年間で放送大学を卒業しました。少し自信がつきました。まだ何かに挑戦できそうな気がしてきました。

ボランティア活動を続けるうちに「社会福祉」に興味がわき、ここでも 3 年次編入で某福祉大学の通信課程で、社会福祉を専攻し、社会福祉士の国家試験に合格しました。

それも放送大学という下地があったからこそ達成できたのだと思います。勉強だけではなく、放送大学でしか出会えなかったであろう素晴らしい大先輩の方々や同年代の方々との出会いもありました。

家事や子育てに追われるだけで、何かにチャレンジすることなく過ごしていた私でしたが、平成の中間地点で放送大学に出会い、目標を達成する喜びを覚えた、この 14 年間でした。

国家試験の後、大きな病気をし、頑張りが利かなくなったので、職業としての社会福祉士は断念しましたが、これまで勉強してきたことを少しでもボランティア活動や地域活動に活かしていきたいと思います。

特集：「平成時代を振り返って」

私の平成時代 －東日本大震災－

石橋正彦

1995 年（平成 7 年）に阪神淡路大震災、2011 年（平成 23 年）に東日本大震災があり、その他にも地震や台風・集中豪雨などによる被害の頻発から、「平成」は自然災害大国日本を再認識させる時代だったと思います。なかでも私は仙台で大学院時代を過ごしたこと、また妻が東北出身で友人・親類などが東北に多く、身近に被害もあったことなどから、東日本大震災は特別に大きな存在でした。

2012 年 7 月に盛岡で面接授業を受講した後、釜石、大船渡、陸前高田と海岸沿いに津波の跡を見る機会がありました。震災後まだあまり経っていなかったので、ずっと続く瓦礫の山々、陸前高田の海洋博物館の骨組みだけになった残骸のすさまじさなど震災と津波の被害の実態は強烈でした。またその翌年、今度は釜石から北上して震災の跡を見てきましたが、田老地区の「万里の長城」を思わせるあの巨大な防波堤が破壊されている様は、改めて自然の力の大きさを実感させるものでした。その 2 回の旅で何回か仮設住宅を見ましたが、ひっそりと並んで建っていて、昼間なのに、何故か人の姿がなく、見ることを許さないような雰囲気だったのが印象的でした。

既にあの時から 8 年以上経ったのに、まだ沢山の人が仮設住宅での生活を強いられています。最近も仮設住宅での孤独死の報道が何回かありました。東北復興に使われるべき莫大な経費、人材、建設機材がオリンピック競技施設建設に回された結果、東北復興が遅れ、オリンピックがなければ失われなかったかもしれない人命が失われていることを思うと、素直にオリンピック招致を喜べないのは私だけではないでしょう。大規模自然災害はまだまだ続くことでしょう。「想定外」で仕方がない、と自然災害に対して備えを十分にしないまま、あるいは放射能処理の対応が全くないまま、原子力発電所は各地で次々に再稼働されています。「平成」から得た経験が活かされるのはいつのことでしょうか。

特集：「平成時代を振り返って」

平成大災害の記憶

金田保男

平成時代に 2 回の大災害が発生した。1995 年の「阪神淡路大震災」と 2011 年の「東日本大震災」は、記憶に新しい。うち「阪神淡路大震災」で、語られることなく封印されてきた事実の一部を私自身への警鐘の意味で述べてみたい。

会社の仕事で私が困難に直面していた時、手を差し伸べてくれた私の尊敬する先輩 S 氏は当時大阪支店に勤務しており、神戸の単身者住宅で、「阪神淡路大震災」に遭遇した。彼はその時の事について「思い出したくもない」と硬く口を閉ざしていた。時が流れ心境の変化があり、認めていた手記（半生記）を私達仲間に公開してくれた。“ パンドラの箱 ” が開かれたのである。彼の居住していた「魚崎」の住宅も損傷し住まうことは出来なくなった。私が資料として残しておいた “ 魚崎の文字が出てくる写真 ” を探し絶句した。

この地震で一瞬動転した彼は一時避難後気を持ち直し徒歩で大阪の勤務先に向かったが、倒壊した家の下敷きになり助けを求める方がいて、通行人数名と救出したという。疲労困憊の末大阪支店に辿りつき、準備してくれていた食事を頂き蘇ったという。その後大阪の大先輩 I 氏宅に仲間と交代でお世話になる。唯一の交通手段としていた自転車も盗難にあった。手記にはこの大災害時の人間模様が良く顕れていた。本人も忘れかけていたが、後に人命救助にあたり社長から感謝状と金一封を頂き、当面の身の回り品を揃える事ができたそうである。

この震災時逸早く救援に向かったのが、名古屋営業所の社宅の住民である。灯油と灯油ストーブを買い求め、大阪支店の社宅にその日のうちに届けたと聞く。神戸程の被害は免れたもののインフラの寸断された大阪では、大きな救いになったという。特に組織化しているわけでもなく、訓練しているわけでもない方が何故素早い行動が出来たのだろう？私には同じ転勤族の絆としか思い当たる処は無い。

魚崎北町商店街の看板が見える
出展：1995/2/1 アサヒグラフ

特集：「平成時代を振り返って」

あざなえる縄

大橋陽子

平成という時代区分内に何があったのでしょうか？私にとって国内では先ず二度の大震災と放射線漏れの惨事です。ことに福島の原子炉が崩壊する映像を見たとき、突然「自分は科学者なのだ」と自覚しました。年代、分野を問わず、国籍すら問わず、科学者は総懺悔すべきだ、とそんなことを私が呟いても無視されてきましたが、ある席で「私もそう思います」と大きな声で賛成して下さったのは放送大学の「社会技術概論」の講師のお一人、K 先生だけでした。

STAP 細胞事件が起きたとき、私は科学の終焉のような気がしました。しかし、20 世紀の終わり頃からの科学に対する社会の要請の急激な変化を考えるとき、ある若い個人だけを責めていいものだろうかと思い直しました。一方で iPS 細胞をはじめ人類の幸せに繋がる多くの研究がありながら、科学とは諸刃の剣そのものなのですね。

私生活では平成元年に子供が大学生になった機会にブリッ子主婦は自主的に卒業して、ようやく研究をはじめ、世紀が代わってから放送大学と出会うことができました。放送大学は通学制教育の間はついサボりがちだった代償として穴だらけのまま生きてきた骨組みを補強する方法として無二の機構であり、更に勤勉でさえあればその上に新しい知識を積み上げ得る礎石ともなる組織であることもわかりました。

一方、ダンスもはじめました。突立っているより仕方がなかった私に業を煮やしたダンスの先生に強制的に教えられた縄跳びは下手でひっかかってばかりいるお陰であまり疲れる余地もなく、一度に 1,000 回は跳びます。しかしどうしてもまだできないのは二重跳び。令和の世、90 才までにはできるようになるでしょうか？

私が所属する理化学研究所のある送別会で

特集：「平成時代を振り返って」

平成　ー鍛えと誇りと別れの30年ー

後藤雄二

私にとって平成の時代とは、年齢的に 28 歳から 58 歳までの 30 年間でした。学習塾の講師の採用試験（ 書類・英語・数学・国語 ）に合格し、仕事に十分慣れた頃に平成が始まりました。私は大学を通信教育課程で卒業しましたが、大学時代の仲間には、卒業後、小中高の教員や塾の教師として就業している人が多数いましたので、私が塾に就職することはごく自然なことでした。

教えるためには、教材研究と共に伝える技術が必要でした。生徒たちからどんな質問が来ても良いように、連日連夜研鑽を重ねたのも懐かしい思い出です。まさに鍛えの日々でした。塾長先生と奥様との絆は年々深まり、私は両親を二組持っているような気持ちになっていました。三人で旅行にも出かけました。

たまたま私がそういう年代だったからでしょうか、平成は大切な人たちを失う時代でもありました。身内の死をほとんど経験していなかった私ですが、平成元年に祖母、5 年に弟、14 年に塾長先生、21 年に妹、22 年に母、24 年に父、26 年に大学時代の恩師、そして 30 年に塾長先生の奥様との別れがありました。

塾長先生が他界された時、私は立ち直れず、その私をケアしてくださったのは奥様でした。奥様にはその後、塾の主幹として働く私の相談役として大変お世話になりました。私が大学院の入試に合格した時も修了が決まった時も、奥様は大喜びしてくださいました。そして、奥様に見守られながら、さらに論文を書き続けていました。

奥様の 582 日間の入院中、私は毎日面会に行きました。「少しずつお別れをする日々」を頂戴できたせいか、奥様の死は冷静に受け止められ、私は深い悲しみからすぐに立ち直ることができました。

放送大学に出合えたことは、終わりのない鍛えの日々との出合いでもありました。大学時代から現在まで、通信制で学び続けていることは私の誇りです。その鍛えと誇り、大切な人たちとの別れ、それらが心に残る「平成」でした。

特集：「平成時代を振り返って」

ーそれは1枚のチラシから始まったー

古内　都

昭和60年～平成9年への10余年は、義母の認知症と3人の息子の中学受験期が重なり、物理的にも精神的にも余裕のない毎日でした。そんな時、手にしたのが読売カルチャーの「臨時募集ー表装入門ー」のチラシでした。「自分が楽しくなければ、人に優しくなれない」と自分に言い訳をしつつ、趣味で続けていた書の作品を、自分で掛け軸や屏風に仕立てたく平成3年表装教室に入会しました。

その後、研究科で学びながら平成7年NHK文化センターで指導員助手として教え始め、ほどなく指導員としてNHK文化センターと読売カルチャーの2教室で教え現在に至っています。

また、平成12年から研究科時代の仲間と年2回ー表装作品展ーを開催し続けており、平成22年から金沢八景「旧伊藤博文別邸」のボランティアとして毎月、床の間の掛け軸の掛け替えをしております。

その間、平成20年に「1級表装技能士」の資格を取得しました。このようにして1枚のチラシから始まった日本文化の裏方ともいえる表装技術を通して、もの作りの技・材料・道具などに関心が高まり、手漉き和紙の性質、用途を探究すべく、平成18年に放送大学の卒業研究「和紙研究ー名塩紙ー」平成20年に修士論文「情報媒体としての料紙装飾ー『西本願寺本三十六人家集』の加工料紙ー」へ繋がっていきました。

結果的に、30年後の自分のあり方を、義母から教えられたような形で始めた表装から学びの広がりと愉しみを得た平成時代となりました。

特集：「平成時代を振り返って」

平和への希求

永井藤樹

「歴史は繰り返す」とは、よく言われますが、私は「歴史は相似的に繰り返す」と言った方が的を射ているように思っています。

平成23年（2011年）3月11日の東日本大震災は、大正12年（1923年）9月1日の関東大震災に相似しています。そして、2年後の大正14年（1925年）に社会運動の抑止を目的に治安維持法が制定され、さらに昭和16年（1941年）国体護持を目的に改正され、拡大解釈して隣組組織を通して相互監視を行わせ、戦争に批判的な人物を密告させ、これに特高権力が襲いかかりました。黙秘・否認に対しては拷問により自白・転向を迫り、時には獄死させて戦争へ突き進みました。この法律は、敗戦という一大転換を経なければ放擲できない悪法でした。猛威を振るった治安維持法が廃止され、基本的人権と自由や民主主義を享受できる時代になりましたが、平成の後半に入って戦前回帰の気運が醸し出されるようになったのではないかと心配しています。

平成25年（2013年）に秘密保護法が制定され、これにより「国民の知る権利」に制限が掛けられ、同時に権力による「プライバシーの権利」侵害の恐れが出て来ました。続いて平成26年（2014年）、集団的自衛権の行使容認を閣議決定しました。翌年には安保関連法案が次々と制定され、平成29年（2017年）に「共謀罪」が成立しました。これら一連の法律は、纏めて現代版「治安維持法」に相当する恐れがあるのではないかと懸念しています。そして、憲法9条への自衛隊を明記（自衛隊を憲法上の組織とする）しようとする動きです。9条こそ戦後日本の平和主義の根幹をなす条文だと思います。

私は敗戦の年に小学校に入学したので、戦争の記憶が微かに残っています。昭和の残りの43年間と、平成の30年間は国民の「平和を希求」する強い意志に支えられた近現代において、初めて戦争を経験しなかった時代でした。だからこそ、後の世代に「最後の平和の時代」であったと言われないようにしなければならないとの思いを強くしています。

弘明寺サロン・レポート

●第64回：2018年12月14日（金）

特別講演会は高橋和子客員教授の「笑いとふれあいが心身の健康を保つ」でした。いつもと違う円形座席の全員参加型で先生の踊りも披露されました。引き続き、忘年会を開催。場所は上大岡京急百貨店内のレストランで、福富所長、河内事務長にもご参加いただき、懇親を深めました。

「参加者：講演会38名、忘年会30名」

高橋和子客員教授の特別講演会

●第65回：2019年1月11日（金）

映画観賞とフリートーキング。

放送大学の卒業生であるこうの史代さん原作のアニメの映画「この世界の片隅に」を鑑賞後、フリートーキング「私の戦争体験を語る」は石橋正彦神奈川同窓会副会長の司会進行で、参加者の体験を語っていただきました。

在住していた場所はまちまちでしたが、年齢的にはほぼ当時4、5歳の方が多かったので、学童疎開のお話はありませんでした。

1945年5月25日のB29、470機の空襲の恐ろしさ、富山市の大空襲では防空壕に避難した人がB29の焼夷弾にやられ、多数の死者という悲しい思い出、船橋にお米、サツマイモの買い出しに行った体験、ジャガイモのお昼ご飯といった食糧難、買い出しの記憶等々悲惨な戦争体験が発表されました。

「参加者：約40名」

●第66回：2019年2月9日（土）

映画「黒部の太陽」の観賞後、弘明寺商店街の「魚や」にて懇親会を開催しました。

映画は往年の名優が多数出演しておりましたので懇親会では昔話に花が咲きました。

「参加者：映画鑑賞会約50名、懇親会20名」

（高橋照夫）

社会貢献活動（プラン）

神奈川同窓会は1992年からプラン（Plan International Japan）を通して途上国の子ども達の教育・生活環境の向上のための支援を続けています。これは全国の同窓会で神奈川同窓会だけが取り組んでいるとても有意義な活動なのです。

私達は日頃平和で安心・安全な毎日を過ごしていますが、世界にはまだ自宅で安全な水を確保できない人達が10人に3人、安全なトイレがない人が10人に6人もいるのです。

途上国の子ども達をめぐる問題について私達が知らないことはまだまだ多くあります。安心・安全な毎日を途上国の子ども達と少しでも分かち合うこと、私達が取り組む社会貢献活動は小さなことかもしれませんが、そこから学べることは多くあります。これからも神奈川同窓会の社会貢献活動にご理解・ご支援をよろしくお願いします。

（石橋正彦）

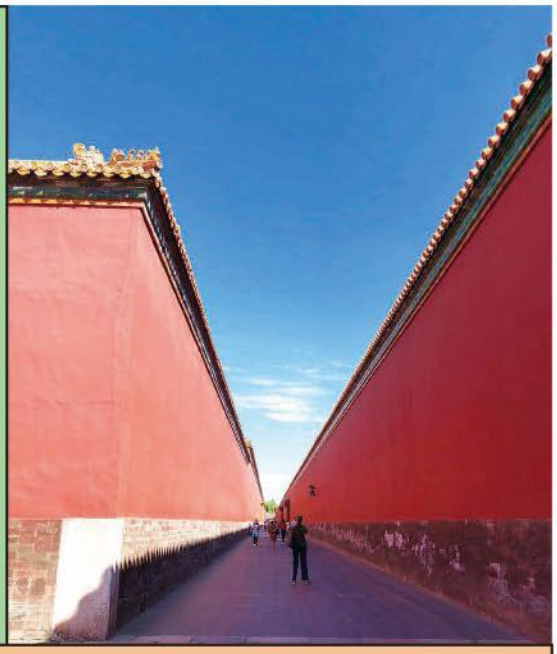
社会貢献活動（あしなが育英会）

2009年3月30日、大学叢書3冊の創刊を契機に叢書の販売手数料を「あしなが育英会」に全額寄付する活動が始まりました。2018年度は年間78冊、137,730円の売り上げで35,842円を育英会に送金できました。入学者の集い、卒業生の集い、秋・春のフェスタ、それぞれ2回と5月の同窓会総会の年7回、定例販売を皆さんの協力で実施しています。奨学金利用学生からの礼状は談話室に掲示しています。

また、「あしなが育英会」への叢書販売とは別に「大学徽章」と「まなぴー」（イメージキャラクター）のバッジを販売しています。放送大学同窓生、在学生、教授、職員を問わず、広く着用して連帯感、一体感、放送大学との帰属意識の高揚のため普及、協力をお願いしていますのでよろしくお願い致します。

（村田カズ子）

会員投稿写真



北京の故宮の赤壁

故宮の赤壁の通路は過去2回のツアーでは通れず、今回3度目にしてやっと会えたという思い。ペキンブルーの空と赤い壁が永年の思いを昇華させてくれた。　万場由美子

第14回映画上映会のお知らせ

神奈川同窓会では次回上映会を下記の内容で開催します。皆様のご参加をお待ちしています。

映画タイトル：「ドクトル・ジバゴ」

日時：2019年8月3日（土）　13：00～17：10
（上映時間は約200分）

会場：神奈川学習センター第7講義室

解説：『ドクトル・ジバゴ』（製作1965年、製作国：イギリス、アメリカ）アカデミー賞で５部門受賞した。

原作となったのはボリス・パステルナークの小説『ドクトル・ジバゴ』です。

ノーベル文学賞を受賞した作品の映画化で、革命に揺れるロシアで2人の女性を愛してしまった詩人ジバゴの切ない人生が描かれています。政治に翻弄された男の人生の映画です。

映画ストーリー：19世紀末のロシア。ユーリー・ジバゴ（オマー・シャリフ）は、医学の勉強を続けるかたわら詩人としても知られるようになった。幼い頃両親を失い、科学者グロメーコにひきとられた彼は、その家の娘トーニャ（ジェラルディン・チャップリン）を愛していた。2人の婚約発表のパーティーの日、近所の仕立屋の娘ラーラ（ジュリー・クリスティー）は、弁護士コマロフスキーの誘惑から逃れるため、彼に発砲するという事件を起こした。　（寺村紀美夫）

事務局だより

2019 年 1 月 12 日（『波濤』56 号掲載）以降の新入会者は下記の通り 19 名の方です。
心より歓迎申し上げます。（敬称略）

新谷州巨	鈴木菊子	森 茂房	楊 剣華
前田展宏	志摩舎人	前山善憲	東出 久
竹本良夫	中村 亘	大村愛子	市村一彦
軽部実保子	村本浩一	山本喜代子	芳賀 直
関口 薫	石黒敬彦	村川勝巳	

お願い

住居を移転された方は、神奈川同窓会に連絡をお願いします。ハガキまたはホームページのURL:http://hatoh.net/ の「入会案内欄」からでも結構です。また例年総会案内と一緒に年会費「払込取扱票」を同封しておりますので未納入の方はご協力の程お願いいたします。

口座名　　神奈川同窓会
口座記号番号　00250-4-□□16183（右詰め）
年会費　1,000 円（送料はご負担願います）
お問い合わせ　金田　保男　Tel.045-333-4426
E-Mail:yasuo-kaneta-626531@hotmail.co.jp

「名誉学生」のお知らせ

神奈川学習センターから 7 名の方が名誉学生となられました。
疋田勝三郎、石丸迪子、櫛田政五郎、杉山秀雄、瀬戸 昇、村川勝巳、吉浜克洋　　（敬称略）

訃　報

高橋英一様
心よりご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

この 57 号は新元号の「令和」になって初めての発行です。これを機に会員の皆様から特集として「平成時代を振り返って」のテーマで原稿をいただきました。卒業生、名誉学生の言葉を含め 12 ページで編集しております。皆様ご協力有難うございました。　（佐藤 敬）